

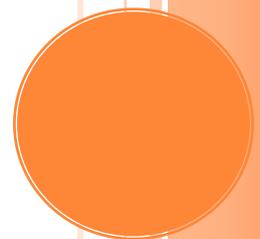
ヒロシマ・セミナー実施報告書

ルワンダの学生と共に平和を考える

2016年5月22日にルワンダの Protestant Institute of Arts and Social Sciences 大学で行った Hiroshima Seminar についての報告書です。

広島市立大学国際学部 4年 向地 由

2016/06/19



ヒロシマ・セミナー実施報告書

ルワンダの学生と共に平和を考える

2016年5月22日(日)に私の留学先であるルワンダ・ファイエ市の Protestant Institute of Arts and Social Science(プロテスタント人文社会科学大学、以下ピアス大学)にて“Hiroshima Seminar”を行いました。広島・長崎の原爆に関する書籍・絵本・映像資料を寄付して下さった ANT-Hiroshima 様、株式会社トモコーポレーション様へのお礼を兼ねて、セミナーについての報告をさせていただきます。

セミナーの概要

日時：2016年5月22日(日曜日)

場所：Protestant Institute of Arts and Social Sciences, ファイエキャンパス

参加者：学生団体 Peace Club に所属する学生(平和と紛争学専攻学生、神学部学生、開発学部学生。国籍はルワンダ、コンゴ民主共和国、ブルンジ)、平和と紛争学学科長、アメリカ人の英語の先生、平和と開発センター職員、計 30 名程度

セミナー実施者：北村美月(東京外国語大学 4 年)、向地由(広島市立大学 4 年)

開催に至った経緯：4月にピアス大学にある学生団体 Peace Club の代表に話を持ち掛け、セミナー実施の承諾を得ました。5月22日に3時間程度の時間を頂くことになり、ピースクラブの学生たちへの呼びかけやポスターの貼り出しなどを行ってまいりました。

セミナー内容：広島の歴史についてのプレゼンテーション(10分)、“White light Black rain”の鑑賞(1時間)、「継承」についてのプレゼンテーション(10分)、ディスカッション(1時間)

またセミナー開始前と終了後には、自由に書籍や絵本を手にとって閲覧できる時間を設置しました。

プレゼンと映像資料について

大正時代までさかのぼる軍都としての広島について簡単に説明を行いました。その後、1945年の原爆投下と被害の影響についての説明を行いました。映像資料を見た後、広島における過去の継承についてプレゼンを行いました。どのような媒体を用いて広島は過去の継承を行っているのかについて話しました。参加者の皆にとっては遥か遠い日本のことなのに、とても興味を持って必死に耳を傾けてくれました。継承についてのプレゼンテーションの後に質疑応答の時間を設けたのですが、そこでは学生から沢山の質問を頂きました。

学生からの質問

- ・何で日本は原爆を落としたアメリカのことを赦せるのか？
- ・日本政府は被爆者に対してどのような対応を行ったのか？
- ・なぜ戦後にアメリカの支配下に置かれ、そこではどのような支援がなされていたのか？
- ・アメリカに謝ってもらうことを期待しているのか？



<感想>学生たちからの質問は良いポイントを突いていて、私自身もう一度広島について考えさせられるきっかけとなりました。初めて広島・長崎のことをきちんと学んだ学生たちにとって、今の日本とアメリカが友好的な関係を築いているのはとても不思議に感じたのだと思います

た。ジェノサイドという辛い過去を経験・共有してきた学生達にとって、「赦すこと」や「謝罪」はとても重要な問題であり、広島の実事についてもある種の共通性を感じたのではないかと思います。



ディスカッションについて

ディスカッションではこちらから質問を2つ用意し、誰でも自由に発言できる場を設けました。ディスカッションクエスチョンは「私たちは過去の悲劇を継承していくべきなのか?」「どのように継承していくべきか?」というものでした。私がこのセミナーを実施するにあたって強く意識していたのが「ルワンダとヒロシマを繋ぐ」ということでした。広島・長崎についてこちらが一方的に情報を提供し、その残酷さと平和への想いを訴えるのではなく、紛争を身近に経験した国々の学生達と共に何かを考えたい、一緒に想いを馳せたいと思っていました。なので、ディスカッションではヒロシマ・ルワンダに共通するであろう「継承」について焦点を当てました。

Q. 私たちは過去の悲劇を継承していくべきなのか? という質問に対する意見

発表者全員が「継承していくべき」と答えました。以下は学生から挙げられた意見です。

- ・私達は過去に起きたことを知るべきだから。
- ・戦争や紛争を防ぐために必要だから。
- ・平和を保っていくために必要だと思うから。

Q. どのように継承していくべきなのか、ムランビ虐殺記念館についてはどうか? という質問に対する意見

・人間としての尊厳を保ちながらやるべき。人間の尊厳を傷つけるような写真やイメージは良くないと思う。Without Painful(苦しみが伴わない)継承方法がいいのではないかな。

・悲劇を教えるためには良い方法だと思う。子どもに教えるを引き継いでいくことが出来る。



・多くの人々がジェノサイドの事実・歴史について学ぶことが出来るので良いと思う。

・白骨化石灰で固めた無数の遺体を並べているだけの展示はどうなのか。家族からはちゃんと埋葬してほしいという意見も出ている。

<感想>学生たちの中では残していくべきだという意見がほとんどでしたが、残し方については議論が分かれ、人間としての尊厳を保ちながら行っていくべきという意見もありました。私がムランビ虐殺記念館を訪れて感じたのは、この展示方法はとても残酷で人間としての尊厳が保たれているのだろうかという疑問でした。しかし学生の中にはその残し方でいいのだ、という意見もあり少し驚きました。実際に自分が遺族だったらどう思うのだろう、と改めて「継承の仕方」について考えることが出来たディスカッションでした。

セミナーを終えての感想

留学に来る前から、広島で生まれ育って平和を勉強してきた自分がルワンダに行く意味は何なのだろうと考えていて、ルワンダとヒロシマを何かしら繋げたい！こちらの学生と一緒に考えたいという想いがセミナーの実施に繋がりに本当に嬉しかったです。

ルワンダも22年前にジェノサイドという悲劇を経験し、今も傷を抱えた人々がたくさんいます。もちろん広島・長崎と文脈は異なりますが、「赦しと和解」そして「過去の悲劇をどう解釈し、残していくのか」という点については日本と繋がる部分があることを実感しました。

今回のセミナーを通して、改めて平和を学ぶ意味を考えることが出来ました。核兵器だけではなく、ジェノサイドも暴力も戦争も、人類にとって共通の苦しみであり、なくしていくべきものだと強く思います。またこれらを考える上で、日本が過去に行ったことについて、その加害の歴史についてもきちんと学んでいかなければならないと実感しました。日本の謝罪を待ち望んでいる人たちが世界のあちこちらにおり、日本とそれらの国々で真の和解は達成できていないのではないだろうかと思いました。平和を達成するためにまだまだ考えていかなければならないことが沢山あるということを実感させられました。

ヒトは争わずにいられない生き物かもしれませんが、暴力や武器を用いず平和的に解決することは可能なのではないかと思います。今も世の中には武力と戦争が沢山ありますが、「こうありたい」という理想を捨てず、現実に対し悲観的になりすぎず、追従しすぎることなく、これからもこの大きな問いに挑みたいと思います。まだまだ道半ばではありますが、私自身これからも平和を学び、日々実践できる小さなアクションを積み重ねていきたいです。

最後に、今回用いたDVDや広島・長崎の原爆についての書籍・絵本・映像資料を寄付くださったANT-Hiroshima様、株式会社トモコーポレーション様、この度は誠にありがとうございました。深くお礼申し上げます。学生たちが原爆のことをより深く学ぶためにこれらはとても役立ちました。なお、寄付していただいた資料はすべてピアス大学の図書館に寄贈させていただきます。

